

# カリスマ美容師（）

お前の後ろだ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

燃え頭に成ったので、ホモ（↑）とタヒ（ソラ）を回避したい話。 ※BLタグは保険です。

# 目次

0	1
1.5	」
ミカン時々ウメ	く隣に
10	1



## 01

——よろしくね？

「はあ。頼まれたから来てみれば……これは中々」

この世界で出会った小悪魔系の可愛い可愛いお姫様。そんな子から、ハート混じりのお願い……おねだりをされてしまったら、領かないわけにはいかない。

さびれて所々壊れた倉庫の屋根部分。まだ20代とは言え、若い子からしたらオツサ  
ンと呼ばれる事もある年齢。立っているだけだと疲れる為、その場に腰をおろす。中が  
覗ける中央に大きく開いた穴付近（屋根）に片足を曲げ手で抱える様にし、もう片方の  
足はブラブラと下に垂らす。

眼下に広がる光景に僅かに引くも、この手の族は一般的に忌避されるものの。そこそ  
こ存在するのが現状。その為、それほど珍しい事でもないかと溜息を吐き考え直す。

「実に、彼らは若くて可愛いよね。何もかもが——」

そっか。もうそんな時期なんだね、早いなあ。

それは僕も当時は気づかずに「燃え頭さんに似てるわ。イケメソうえーい！」とノリ  
で成り切りプレイをして……。どんどんと原作ルートデッドを外れる分岐点を逃していき、実

際に「カリスマ美容師」とか。既に戻る道は消え、こつ恥ずかしい肩書が周りに浸透するくらいには、年を取ってしまふ訳だ。

まあ、お陰様で原作知識なんて、自スレット・ファイア分の死の原因とホモの人が印象的過ぎて他は

曖昧。間違つて記憶している可能性さえあるから、全くもって当てにならない。

何故もうちよつと記憶の引き出しを自由に使えた昔に、しつかりとノートに書き留めていなかったのかと絶賛後悔中だ。

「あつ、やつ」

うん、僕は明日も朝から仕事だし。と言うか、今も仕事の休憩時間を使って抜け出して来た訳で……。さつさと済ませちゃいますか。遅れたら、次の予約をしてくれたお客様に失礼だからね。

それもこれも、人使いが荒い子の所為なんだけど。引き受けたのは自分だし。彼女に文句を言うのは筋違いってね。

「やだ、やめてっ!!」

下の方では、コンテナに女の子達を何人か閉じ込めているらしく。スカルなんちゃらつて言うCクラスのA・Tチーム。十字が描かれたフード付きの服に髑髏のマスクをした構成員らが、続々と中へと入って行く。

悲鳴がちよつとヤバそうなので、重い腰を上げる。

下手に助けず、出来る限り見守つて欲しいと言われてはいたが。一応、手を出すタイミングや範囲は僕の裁量に委ねられている。どう見ても主人公のイツキ君はポッコボコにやられている最中で、対処が出来る状態ではなかった。

屈伸やら伸びをして、軽く準備を済ませる。

そして、薄っすらとつり上がる口端。

さすがに女の子を同意なしで、無理やり多数で囲うのは紳士じゃない。

それとだ、僕は影が薄かったりするのか？ 地味に傷つくんだけど……。さつきから彼らの上で、気配を消すでもなく普通に観察をしている僕。その存在に気づかないのも、どうかと思う。

まあ、所詮はＣクラス止まりって事かな。

——まだまだだね、なーんて。



仲間の一人に呼ばれ、前回縄張り争いで勝ち取った場所へと来てみれば……。

東中の何人かはやられたのか、血を滲ませながら地面に突つ伏している。そして西中の奴らとは別に、エア・トレックを履いた髑髏の集団がたむろつて居た。

俺らが今までやってきた中坊の喧嘩とは、全く違う。

1対多数。数人とかのレベルではなく、数十人が長い棒状の武器を片手に待機している姿は、異様の一言につきる。髑髏のマスクと黒い服装が、また恐ろしさを倍増させていた。

足がすくむ。勝つ見込みが薄いのは一目で理解できたが、俺は負けず嫌いだ。下手なプライドが邪魔をし、その事実から目をそらす。

それに、倒れ伏した仲間（東中の奴ら）。姿はハッキリと見えないものの声は聞こえる……捕まっているらしい女の子達を置いて、ひとり逃げ出す事なんて出来ないッ。

いざ、戦闘に入ってみれば……それは一方的なもの。戦いにすらならなくて。

「中坊がッ！ 生まれた時から最強だとかぬかしてるそーだな」

エア・トレックと普通の靴ではスピードが違い、相手をとらえる事が出来ずに攻撃を許すだけ。しまいには、集団の頭らしき（間垣まがきと呼ばれている）奴に体を固定され、頭を下にした状態で高い所から急降下。思わず、このままグシャッと潰れた自分を想像し、ジワリジワリとパンツに染みを広げ……。

「——誰に断ってモノ言ってんだテメエ、ああ!？」

戦意が失われていくのを感じた。



「うおっ!? クセ、こいつチビリやがった!」

「つーか、既にその域じゃねえっ! 洪水だッ」

~~~~~

「さーさー後がつつかえてつから、あとが」

「コブラツイストなら俺が教えてやんよ、俺のキングゴブラで!」

「まっ待てよッ! 女の子達はカンケーねえだろっ!!」

数人の女の子達が小さいコンテナ内に押し込められ。か細い声で「イツキ」と俺の名前を呼び、悲鳴が上がる。これから始まるだろう惨状は頭の悪い俺でも予想でき、もう一度心を奮い立たせる。

それでも、助けに行きたいのに——……。

「あとのコタ、西中おれらに任せてくださいよ」と、動くのもやつとな俺へとあびせられる暴力は、髑髏の奴らから西中の奴らに代わっただけで止まらない。

「お前は俺らとあそぼーぜ」

「今日はテメーをケツの穴に爆竹突っ込んだカエルみたいにしてやつよ」

もう少しで手が届いた筈で。

目の前の薄暗い中で行われる行為を止めようと手を伸ばしても、笑った顔が「惨めにここで見てろ」と踏み潰す。

テメーらもつ、見てねえで……!」

意識が戻ったのか、起き上がり立ち尽くす仲間へと「オイツ」と声を掛けるも見てみぬふり。

気持ちは分からないでもない。だけど、俺はその時……もう、あいつらは諦め見限ったんだなと感じとり奥歯を噛みしめる。

「——どうも、皆さんこんにちは」

殴られ蹴られながらも、不甲斐なさだけが心を占めていた。そんな俺のもとにスルリと入る新たな男の声。

「なにやら楽しそうな事をしているようだ、つい来てしまったよ」

涼し気な声の調子とは裏腹に、西中の奴らを一瞬で地面へと落とし気絶させた苛烈な炎。髑髏の奴らと同じエア・トレックを履いた人（暴風族）が上空から現れた。

「ツなんだテメエ! ノコノコ入って来やがって!!」

「お、おい、アレって……」

「いや。でも、こんなトコにいるわけが——」

先程まで、余裕しやくしやくに見下していた視線が二分化する。一つは、今からお楽しみタイムが始まるんだから「邪魔をするな」という怒り。もう一つは、「何でここに居るんだ」という怯えと驚愕。

何がなんだか分からないし、俺は目の前に立つ人の事を知らない。それでも、あいつらとは違い安堵していた。熱く燃え上がる赤いソレが薄暗い倉庫内……俺を照らし、元気をくれる。

「チっ！ 誰だか知んねえけど、ヤッチまえばいいじゃねえかつ」

「ば、バツカ！ 待てって」

「つく。こうなったら、仕方ねえつ」

混乱状態から瞬く間に戦闘モードへと移り変わり、俺があんなにも苦労した相手をしていいね。元気が良いのは、やはり若い子の特権だ」と笑い、軽く捻る。

もはや遊んでさえいる背を最後に、緊張状態が続いたこともあつてか。ホツとしたと思つた瞬間、疲れが一気に押し寄せ意識が飛ぶ。

ハツとして、目を開け起き上がる。

無事に逃げ出せた後なのか。助けが必要だった存在は、もうここには居ない。敢えて居るとしたら、俺かもしれない……。と、ひどくつまらない乾いた笑いがこぼれ落ちる。

少しだけ寝てしまったみたいで、目の前には灰が宙へと舞い上がり全てが夢だったか

の様な光景が広がっていた。それでも、俺の体の傷も心の痛みも残っていて……そつと胸に手をあて、布切れと化したボロボロの服をギュツと掴み目を閉じる。

「君は強いね」

ふいに聞こえた声へ、「俺は強くなってる。強かったら、こんなにも……」と悔しきや悲しみがごちゃ混ぜになった感情をぶつける。

すると、圧倒的な力の差で幻の様な現状を作り出した人物が、隣へと降り立つ。

その人の奥の方には、目を凝らせば見える程の屍の山。

既に脅威だったものは背景と化し、今では愉快的なオブジェの一つ。微かに聞こえる呻き声はBGMのようで。

ピクピクと痙攣し揺れ動く影から視線を外し、その人を見上げる。

戦っている時は、あんなにも火の粉を飛ばす程の熱量を放ってギラギラと燃えていたと言うのに。今は温かで穏やかな空気を持ち、全てを包み込むように俺の気持ちを受け止める。パサリと顔を隠すように自分の上着を俺に掛け、頭をポンポンと軽くたたく。

出来れば、こんな時に優しくしないで欲しかった。我慢していたモノが、止めどなく溢れ出てきてしまう。その人のファアの付いたコートへと顔を埋め。

ああ、今日だけはこの涙も……。

「痛かった」

「仲間？ お前らの言う仲間って何だよッ」

「しんどすぎ……つらい」

「ホント、うぜえわ」

「消えたい」

俺らしくない泣き言も、嫌なこと全部をここに置いて忘れたい。

でも、「頑張ったね」とゆっくりと撫でる大きな手を俺は頭に記憶し続けるし、このままここに留まっていたいと考えてしまった弱い心も残しておく。

優しい世界はとても心地が良くて、都合の良いモノを見せる夢との判別がつかなくなる。起きていたいののに、瞼は重くなり段々と閉じていく。俺には、ソレに逆らうことなんて出来なくて。薄れる意識の中、必死に手を伸ばした先は現実だったのか……。

——そうか。やはり君は強いよ。そして、これからもっと強くなれる。

「おやすみ、イツキくん 未来の王」

## 01.5 「ミカン時々ウメ ～隣にホモを添えて～

——眠れるお姫様……ではなかったね、王子様を返しに来たよ。

休日の昼間。

ピンポンとチャイムが鳴って出てみれば、宅配でも回覧板でもなく。

「はいはい、ご用はなんですか……」

玄関を出て扉を開けて見れば、そこに居たのはその筋では有名な赤髪の優男。そして、ウチの居候の姿。あまりに突飛な組み合わせに驚き、眉を寄せる。少し厳しくなつた目で「ソイツ、どうした？」と奴が抱える人間を指して問う。

「僕や君の様な暴走族側、Cクラスの子達と揉めてみたいでね」

「A・Tも履いてねーただのバカに、ちよつかい出す様な雑魚と一緒にすんじゃねえよ」  
自分の履いているA・Tに視線を向け苦笑いする奴に、口を出さずにはいられない。吐き捨てる様に指摘すれば、気分を悪くする所か……。カラリとした機嫌の良い笑いをし、「そうだね、確かにそうだ。悪かったよ」と素直に謝る。

「はあ」

「相変わらず溜息ばつかだね。そんなんじや、幸せが逃げてしまふよ？」  
「うっせ」

舌打ち以上に呆れが勝り、溜息がこぼれる。

こう言うのらりくらりと躲すよく分からなねえ感じが苦手で、出来れば会いたくなかつた。とは言えだ、家の者がお世話になつてゐる事実が目の前にある現状で奴を無下にする程、自身がクズの仲間入りするつもりもない。

つたく、いつそ悪い奴だつたら楽だつたのによ。

パツと見はボロボロなありさまだが、よく見れば目を閉じたイツキは呑気に寢息を立てており随分と安らか。無意識なのかは知らねえが、信用しきつたようにダラリと体を預けている様からも奴がやらかした側ではないと見て取れる。

いつまでも家の前で立たれて居ても邪魔だし迷惑。さつさと中へと入る様に背を向け、リビングへと案内するべく廊下を進もうするも、足音は一人分だけで自分の後に続く気配はない。

「何やつてんだよ。さつさと上がれよ」

「申し訳ないけど、ちよつと時間が無くてね」

振り返り、玄関で止まり上がつて来ない奴に声を掛ければ、首を振り断わられる。

「床の上でゴメンね」と壊れ物を扱う様に、玉の付いた野郎を大事な女の子だと思わせる

手つきでゆっくりと下ろす。

そして、包み込むように掛けていた上着へと手を伸ばすも……。イツキが奴のコートを握りしめていたのを見て止める。

「君とはまた会えそうだから、それまで持っていてくれるかい？」

そう小さい声で笑みをおくり、行き先を変更して頭を数回優しく撫でる。

見ているコツチがムズがゆくなる行為や空気感を自然に作れ、ソレがム力つく程になつている。まあ、だからこそ奴は人気だしモテるんだろうが。

困った事に、そんな所が気に入っているのか。俺の身内にもベツタリするのが居るしな。はあ……。

ぼんやりと見守っていれば、気が済んだのか。屈んだ態勢から、スツと背を伸ばし奴が立ち上がる。

「それじゃ、僕は退散しようかな」

「……あー、ウメとは会ってかねえのか？」

いつも自分の他に姉妹の誰かが居て、こうして1対1で話す事は無かったので割と対応に困る。どうせなら「挨拶だけでもしてけよ」と思ったが、本当に時間が無いのだから。いつもだったら、女子供には甘く……特に自分を慕ってくれるウメをとりわけ可愛がつている奴にしては珍しい。頬をかき視線を天井へと少し彷徨させた後、へによりと



眉を下げ俺を見る。

「会うとどうしても長居しちゃうから。また今度、手土産でも持つて来るよ」  
そう言つて一歩下がりが、いつもの緩い笑みが浮かんでいた。

「お邪魔しました」

容姿は派手だしチャライが、きつちりと頭を下げ挨拶をする姿勢には好感が持てる。  
扉が閉まり奴が出て行くのを見送った後、そこでグースカ寝ているバカを見る。無性に蹴り起こしたくなるも我慢。せっかく、奴が大事にここまで持つて来たんだ。

今日くらいは、優しくしてやるか。それに……

「スピちゃん、行っちゃったでしね」

「アレでも奴は社会人だし、仕事あつからな。仕方ねーだろ」

どうやら奴が来ていたのを把握してたらしいウメが、タイミングを見計らっていたのか後ろから現れる。しよんぼりと肩を落とす姿に、「こりやまたスゲーお熱なんだな」と随分とませたウチの末っ子の頭をガシガシと撫でて笑う。

「また来るつて言つてたんだし、いーじやねえか」

今まで狙つたかのようにイツキが不在の時に来ては、ウメや俺達にと手土産として渡されるお菓子やお取り寄せ商品。毎回センスが良く、気をつかわせないラインの価格のモ

ノを選んでくる。偶に、段ボールでお裾分けとして家に送られてくる蜜柑やジャガイモなどは、裕福とは言えない家計の手助けにもなっていた。リカ姉なんかは、申し訳なさそうにしながらも諸手を挙げて大歓迎の姿勢で……。

イツキに関しては、送り主の事を詳しく言つてないのもあり。奴とは知らず、美味しい物を送つてくれる「物好き」が居る程度の認識だろう。

「ウメはお土産がなくても気にしないのに……会いたかったです」

未だ玄関の扉を見ながら小さく呟く姿が親を待つ子供のソレと重なり、家族として物悲しくやるせなさを感じさせた。憧れも恋も親愛もごちゃ混ぜで、多くの感情を募らせた対象には複雑な思いを抱かせるものの、心の中でそれとなく感謝もしていた。



「ただいま」

「お帰りなさい、スピット・ファイア」

気分の上がる曲をかけながら車を走らせて向かった先は、立地の良い所に建つ高級マンション。無事に仕事が終わわり、今日はこの世界の主人公であるイツキ君と出会いがあったりと、色々あったなど回想しつつ帰宅した訳だが……。

え？——なんで、居るの君？

悲しい事に、広くて立派な部屋で一人暮らし。挨拶として一応「ただいま」と言ったが、それに返す人間は存在しない筈だった。

ニツコリと笑い、笑顔でお迎えしてくれるメガネの彼……左ホモ(アイオーン)に僕は1回ドアを閉める。そして、表札へと視線を移し部屋番号が自分の所で間違いないか確認。

うん、合ってる。

先ほど見たものは仕事の疲れか何かによる幻覚だと思い、気を取り直して再度ドアを開ける。

「開けたり閉めたりと、あなたは何がしたいんですか？」

「見間違いないやなかったか……」

「突っ立ってないで、さっさと入って下さい」  
やっぱり居た。

メガネを少し押し上げながら訝しげに見る彼が、玄関で仁王立ちで待ち構えている。

「……えっと、お邪魔します？」

「自身の部屋に入るのに、お邪魔しますはないと思いますが。まあ、あなたの事ですからね」

「一応、聞いておくね。なんで君は家に？」

「なんでとは？ まったく、あなたは本当に私が居ないと……」

「うん、ごめんね」

あれ？ 僕が可笑しいのかな。

素朴な疑問を言えば、怒涛の如く返つて来る言葉に途中から諦めて聞き流す。ここつて、結構高いマンションだからセキュリティもバッチリだし。この小うるさいホモに、家のカードキーを渡した覚えも無い。

「ほら、鞆をこちらに寄こしなさい」

「あー、はい」

流れる様に行われるソレに僕も「悪いね、ありがとう」とお礼を言い、任せる。仕方なさ気な態度ながらも、嬉しそうに鼻でフッと笑う（需要の無い）ツンデレホモに素直じゃないなあと思いつつ。

「ご飯は出来てますから、先に食べてからお風呂へどうぞ」

我が家の様に、鞆を持ち先導するホモに苦笑い。

実はこのやり取りは何度かしていて、若干そこまで違和感を感じなくなってきた。自分がコワイ。僕の定位置を把握済みなのか、丁寧にだがサツと鞆をいつもの場所に置いてくれる。そして、帽子や上着を掛けるポールスタンドの前で立ち止まった背を見て

いれば、振り返った彼と目が合う。

「そう言えば、コートはどうしたんですか？」

「ちよつと預けてきたんだ。飛び立つ前の可愛い雛にね」

聞いてきた割には、薄い反応で「そうですか」と返し。「温かい内に」と美味しそうな料理がのつたテーブルを指し、キッチンへとスタスタと歩いて行ってしまった。

僕は言われた通り、手洗い等を済ませてから椅子に座り彼を待つ。

本当はホモと知り合うこと自体を回避したかったけど、早々に失敗。

出会っっちゃったもんは仕方ないよね……。あと、傍から見るとこの光景は通い妻のようだし、彼の私物が日に日に増えている気がしなくもないけど。

デッドエンドの前に、ホモエンドの危機だったりするのかな？　なんて考えたくもない。友人（相棒）関係なんだから、これくらい普通のこと。

そう自分へ必死に言い聞かせ、ある意味死より恐い未来に「そんなまさか」とカラ笑い。そして、ゆつくりと目をそらす。

きっと彼からしたら、僕の尻や息子はミジンコよりも興味が無いはずさ（切望）。



「先に食べていけばいいものを。あなたは変な所で律儀だ」

「そうかい？ 君が作ってくれたんだから、当たり前だと思っけど」

私の独り言に返すあなたは、キョトンとした顔でこちらを見る。

その表情に、私は色んな感情を心の中で呑み込む。プライベートだと特に抜けていると言うか、能天気さや不真面目さが顕著になる。一見して顔が良いだけの人物が、実は炎の王であり下に数多くの者がつき従っているなんて思えない。

それでも、私はスピット・ファイアを慕う者達のようにそんな部分も含め魅かれている。あなたになら、負けても良いと思えたし諦めもついた。

そして、何だかんだで繋がりが途切れるのを嫌った私は、弱点や隙を探し観察する為だと言いつくをする。あなたの途中から面倒になり流す性格を利用し、勝手に部屋へと入り……あたかも元々居た住人の様に振る舞う事も可能にした。

じわじわと私が居る生活を日常にしようと考え、計画通りだったはずなのに。

原石の輝きを目にしたのか。(A.Tも持っていない)ただの子供に……ポツと出の存在に興味を持っていかれ心を占められるのは、どうにも気に食わない。

だから、「コートはどうしたんですか？」と聞いた時のあなたの答えに嫉妬し、冷静になれない心を落ち着ける為に逃げる様に背を向けた。

これなら……まだ、あなたが溺愛する少女やお姫様とやらの方がましだと思えるほ

ど。

あなたの誇りを預けるだけの価値があるのですか？ その者は……。

スピット・ファイアのトレードマークと化しているファアの付いたコート。

カリスマ美容師と言われる職種に就いているだけあり、ファッションにも拘りを持っている。中でも、今日着ていたソレはチームの者達に誕生日プレゼントに貰ったもので、一番のお気に入りだと本人から聞いていた。

小さな花<sup>つぼみ</sup>を愛でる様な、優しく大輪の花を咲かせる時を期待し楽しみにしている姿は、今まで私が見たどの表情よりも綺麗で……生き生きとし輝いて見えたなんて。

——きつとそれは私の見間違いであり、真実ではない。そうでしょうか？